

飲食店舗のテラス空間類型 －イスタンブルとパリの事例研究－

Restaurant Terrace Space Classification: Istanbul and Paris Case Study

宍 戸 克 実
Katsumi SHISHIDO

This research attempts to study and classify terrace models in restaurants and focuses on terraces in Istanbul, Turkey and Paris, France.

The purpose of this research is to identify the characteristics of terrace spaces by classifying the models using the specifications and location requirements for terrace space construction.

The research has revealed the following. In Istanbul, restaurants are renovated to create a terrace inside the restaurant (to create the outdoor environment inside).

In Paris, the terraces can be classified either as a pathway occupancy terrace or a temporary pathway occupancy terrace. The pathway occupancy terrace is integrated into the store (to create the in-store environment outside). Istanbul has a diversity of terrace models, while Paris has more orderly models.

Keyword: Istanbul, Paris, Restaurant, Terrace, Classification

イスタンブル, パリ, 飲食店舗, テラス, 類型

1. 研究の背景と目的

1.1. はじめに

日本における「オープンカフェ」は西欧のカフェ形態を和製英語で表現されたものであり、日本固有の位置づけと期待を担った存在といえる。近年では、都市再整備や中心市街地活性化、水辺空間の賑わい・景観創出を目的とする試みとして、オープンカフェの導入が図られている。都市再生整備区域における「東京都シャンゼリゼプロジェクト」^{注1)}や、都市・地域利用再生区域における河川敷地への占用許可^{注2)}等の取り組みが記憶に新しい。新宿三丁目モア4番街の事例にみられるように、道路法や都市再生特別措置法等の一部改正がなされ、道路占用許可の特例制度による新たな取り組みが始まっている^{注3)}。しかし、河川敷地や新規都市整備で広く確保された歩道（沿道緑地）が対象とされ、いずれも特殊立地における社会実験としての色合いが強く、一般的な商業地区や店舗が対象とされたものではない。

日本において、飲食店舗のテラス空間が普及しにくい社会的背景がある。テラス空間の設置には行政（保健所）により衛生的見地による基準^{注4)}が定められており、障害となっている。また、

* 鹿児島県立短期大学生活科学科生活科学専攻 助教・修士（工学）

日本の商業地域の道路・歩道幅員は概して狭く、常設・仮設を問わず店頭でテラス空間を確保することが困難である。多店舗展開企業においては、経営方針として全天候型の店舗形態が重視され、季節や天候に左右されない安定した客席空間の提供が前提とされる傾向にある。

テラス空間に社会の期待が集まる一方、飲食店舗のテラス文化が定着する諸外国の実態が十分に把握されているとはいえない。諸外国の事例からテラスの空間構成を再認識し、空間を実証的に把握する必要があると思われる。特に、飲食店舗のテラス空間が定着している西欧諸国、とりわけフランス・パリが広く認識・着目される一方、テラス空間の実態については把握されていない。

1.2. 先行研究

オープンカフェに関する研究は、制度や社会実験に着目したものが多い。欧米のオープンカフェの制度を対象としたものに、加藤¹⁾、エルファディング²⁾らの研究がある。また、社会実験のオープンカフェに着目したものに、土井³⁾、山本⁴⁾、清水^{5) 6)}らの研究がある。心理的アプローチによる研究として小林⁷⁾による店頭客席に対する歩行者の注視行動に着目したものがある。オープンカフェの空間形態に着目したものに、土田⁸⁾、青柳⁹⁾らの研究があり、周辺環境を含めた空間形態の分類を試み、立地とデザインの対応関係を明らかにしている。これらは、テラス空間のデザインを扱った数少ない研究であり、示唆に富むものである。一方、オープンカフェの発生は、立地の特殊性に起因するとみられ、日本国内における普及の限界を示しているといえる。特殊立地によらない一般的な飲食店舗にも、テラス空間を積極的に確保する海外事例への着目も必要である。

1.3. 研究の目的

本研究は、トルコ・イスタンブルと、フランス・パリにおける飲食店舗を対象に、テラスの空間構成に着目し、空間の類型化を試みるものである。また、以下のテーマについて明らかにし、テラス空間を把握・追求する。①飲食店舗とテラス空間の建築的関係性を明確にする。②テラス空間を構成する設備や建材等の仕様、土地の分類（私有地・公道）から、空間ヒエラルキーを明確にする。③テラス空間を形態分類し、特性について解明する。

本研究は、トルコにおいて 2008 年の室内禁煙法^{注 5)} 施行後に、飲食店舗の喫煙可能空間確保を目的としたテラス空間の創出現象に着目した筆者による研究¹⁰⁾ による試論を前提としている。

2. 研究方法

2.1. 対象地区・建築・空間

イスタンブルにおける調査対象地区は、筆者による研究¹⁰⁾ で調査した地区から特殊立地を除いた、商業地区、広場、歓楽街の要素をもつ地区とし、そこに立地する飲食店舗に着目する。

パリにおける調査対象地区は、イスタンブルと同様に商業地区、広場、歓楽街と都市空間性

質が共通する地区を選定し、調査・研究する。商業施設が集中し、飲食店舗が多く分布するバステュー広場周辺に地区を絞り、調査を行った。

商業地区、広場、歓楽街において類似した形態の飲食店舗が集積していることに着目し、各地区における典型的形態の事例を抽出する。飲食店舗の用途にはカフェやバー、居酒屋等が含まれるが、特に限定・分別しない。

2.2. 調査概要

イスタンブルでの調査は、2011年8月と2012年3月の2回、パリは2012年3月の1回行った。収集する空間情報や調査する視点は以下である。店舗が立地する周辺環境をまず概観する。店舗形態に関しては、飲食店舗の建築とテラス空間の接続形態、テラス空間の構成建材、季節変容、常設（固定）・一時的使用、テラス空間の公道の占有・使用^{注6)}の区別、テラス空間における喫煙席の分布等とした。尚、トルコ・フランス両国とも、室内禁煙法が施行されており、店内（建築内）喫煙は原則禁止である。また、フランスは3月調査のみであることから、季節の空間変容の視点は含まない。

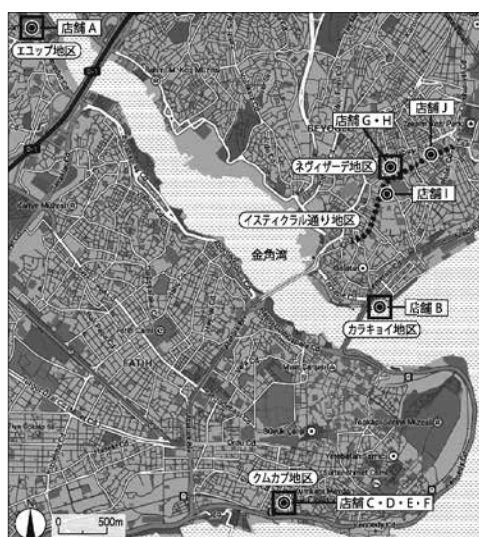


図1 イスタンブル調査地区・店舗

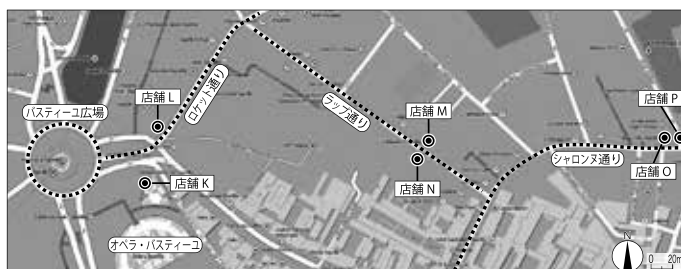


図2 パリ・バステュー調査店舗

3. イスタンブルのテラス空間

3.1. 広場立地

店舗 A (図 3・4) : エユップ広場

エユップ地区は、イスタンブルにおいてイスラームの宗教色が特に濃い地区である。トルコ国内外から敬虔なイスラーム教徒のグループや家族が多く訪れる。エユップスルタン・モスクに隣接し、集団礼拝用の宗教的広場がある。

広場の一角に、観光・巡礼客を対象とした飲食店舗が建ち並ぶ。そのうち典型的形態の一店舗を対象とした。店舗前には、店舗建設時から計画的に配置された大規模なテラス空間が確保されている。店舗と一体構造のテラス空間を構成する鉄骨フレームが設置されている。上部には開閉式のテントが設置されているが、前面・側面は常時開放されている。広場に立地するため、建築・テラス空間ともに広場を占用している。

店舗は禁煙法施行後に開店し、テラス空間は喫煙可能席となっているが、喫煙空間の確保がどの程度考慮されたかは不明である。トルコにおける敬虔なイスラーム教徒の家族や女性同士

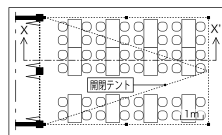


図 3 店舗 A 平面図

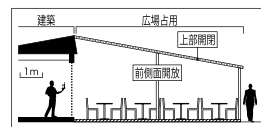


図 4 店舗 A 断面図

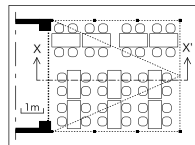


図 5 店舗 B 平面図

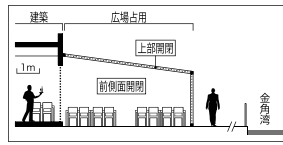


図 6 店舗 B 断面図

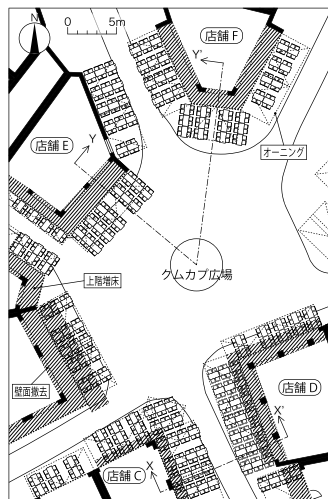


図 7 店舗 C・D・E・F 平面図

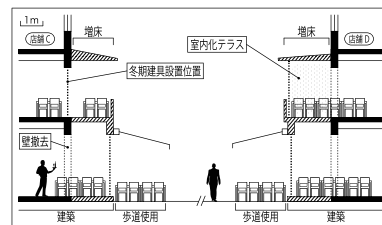


図 8 店舗 C・D 断面図

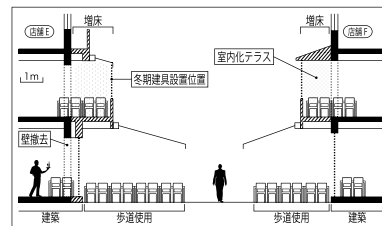


図 9 店舗 E・F 断面図

では、飲食店舗の利用が宗教・文化的に一般的ではない。従来は「家族サロン」と呼ばれる、別室・別階を利用してきた。テラス空間は、屋外空間という公共性を備えていることから、敬虔なイスラーム教徒の家族や女性の利用を可能とした新しい概念といえる。エユップ広場におけるテラス空間は、喫煙空間の確保という枠組みではとらえきれない存在である。

店舗B（図5・6）：カラキョイ港広場

カラキョイ地区は、ガラタ橋新市街側袂に位置し、周辺にはカラキョイ港がある交通の要衝である。歴史的にも金融・娯楽の中心地であり、複合的な都市機能を備えた活気ある特性をもつ。金角湾に面した広場（遊歩道）に飲食店舗が建ち並ぶ。そのうち典型的形態の一店舗を対象とした。

店舗前面に鉄骨フレームが組まれ、テラス空間が設けられている。上部は開閉式テントが設置され、側面には防風シートが設置できる仕様になっている。店舗前面はカラキョイ広場遊歩道になっており、道路（広場）占有によるテラス空間である。冬期は全面覆われ、閉鎖的なテラス空間になるため、金角湾を望む眺望は得られない。このテラス空間は、禁煙法施行後に喫煙空間確保を目的として設置されたものである。冬期日没後は閉鎖的な喫煙空間となり空間環境が著しく低下するが、それを除けば、喫煙・非喫煙の枠組みを超えた魅力あるテラス空間である。

3.2. 歓楽街立地

店舗C・D・E・F（図7・8・9）：クムカプ地区

小規模なクムカプ広場を中心に、放射状に延びる各街路に居酒屋が建ち並び、歓楽街が形成されている。一帯は西洋近代期に形成されたギリシャ人居住地区で、当時の中低層集合住宅群が継承・転用されている。街路の両側に店舗が軒を連ねており、そのうち典型的形態の二断面を対象とする。広場一帯への車両の進入は時間帯規制されており、歩道部分には客席の設置が許可されている。

店舗1階部分に関しては、街路側壁面を大きく開口・改修され、店頭席と店内席を一体化させたテラス空間を構成している。テラス空間上部は、上階の増床部分とオーニング^{注7)}で構成される。冬期は、外壁面に脱着式^{注8)}のガラス製建具^{注9)}がはめられ、店内とテラス空間が明確に分離される。冬期もテラス客席は維持されるが、規模は縮小する。

上階に関しては、フロアを増床し、壁・屋根とともに街路歩道上に張り出させている。壁は柱を残し全面開口され、店内とバルコニーがシームレスに接続される。上階増床部分は、バルコニーに屋根を設置し、壁面部分は脱着式ガラス製建具により全面開閉できる。冬期は、バルコニーごと脱着式建具で閉じられ、バルコニーを含め「室内」となる。

街路は車道と歩道に分離されている。歩道部分は、店舗テラス空間として独占的使用の許可を受けている。歩道部分の占有は許可されず、常設設備は設置されていない。

禁煙法施行後、喫煙席の確保を目的としたテラス空間の設置・改装に着手し、1階壁面開口・上階客席のバルコニー増床が進められた。冬期以外は喫煙者に限らず、全ての客が好んでテラス空間を利用する。

店舗 G・H (図 10・11)：ネヴィザーデ通り

イスタンブール随一の繁華街・イスティクラル通り裏手のネヴィザーデ通りには多数の居酒屋が建ち並び、歓楽街が形成されている。一帯は西洋近代化期に形成されたアルメニア人居住地区で、当時からの中層集合住宅群が転用されている。

狭隘な街路に店舗が軒を連ねており、そのうち典型的形態の一断面を対象とする。街路は歩行者専用道路になっており、店頭歩道の一部はテラス空間として使用が許可されている。占用は許可されないため、常設固定のテラス空間ではない。

1 階部分に関しては、街路側壁面を全面開口改修しており、店内と一体的なテラス空間が構成されている。テラス空間は街路に直接客席が上部にはオーニングが設置されている。冬期には、脱着式ガラス製建具が設置される仕様になっており、店内とテラス空間が分離される。屋内外がテラス空間化されたことにより、室内側に喫煙席が入り込んでいる。店内・店外の境界が曖昧化され、中間領域を生み出している。

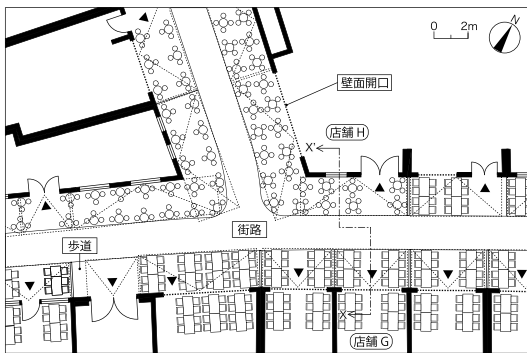


図10 店舗G・H平面図

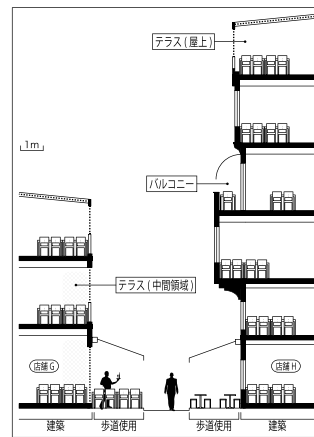


図11 店舗G・H断面図

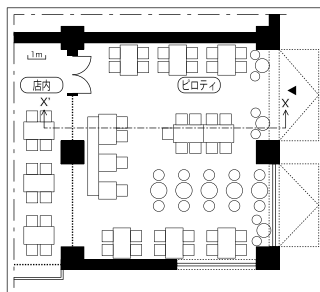


図12 店舗I平面図

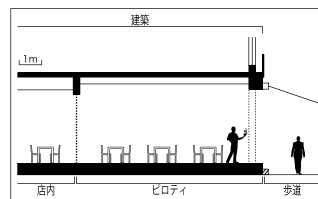


図13 店舗I断面図

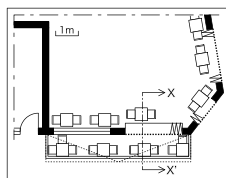


図14 店舗J平面図

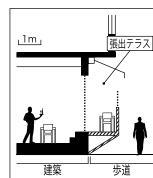


図15 店舗J断面図

上階部分に関しては、壁面を全面・部分開口し、室内の一部がバルコニー化されている。冬期には、脱着式ガラス製建具により閉じられ室内化される。これも同様に、屋内外の境界を曖昧にした中間領域である。店内であるにもかかわらず、中間領域化された店内に喫煙席が入り込んでいる。

屋上部分に関しては、本来、建築物の設置は不可であるため仮設の手法が採用されている。屋上に鉄骨フレームを固定し、上部は開閉式テント、側面には防風シートや脱着式ガラス製建具が設置できる仕様となっている。冬期には全面が閉じられるが、開放可能仕様という根拠により建築内部として位置づけられることを回避し、喫煙可能空間として維持される。

3.3. 商業地区立地

店舗Ⅰ（図 12・13）：イスティクラル通り沿い①

イスティクラル通り一帯はオスマン帝国期に都市の西洋近代化を目指し、モデルとして開発された地区である。通りの両側には西洋近代化期中の中層建築が建ち並び、商業地域を形成している。通りには路面電車が通っているが、基本的には歩行者専用道路となっている。

歩行者専用道路に面して建つ商業建築物の1階部分の一角に入居する飲食店舗を対象とする。街路側建築壁面の柱を残し撤去・後退させ、店舗前面にピロティ^{注10)}空間を確保している。イスティクラル通りは規制が厳しく、占有・使用が許可されないため、建築区画内にテラス空間を確保する手法を採用している。建築壁面の街路上にオーニングが設置されているが、店舗の視認効果を目的としたものである。テラス空間は建具等で開閉できる仕様になっておらず、常時開放された「ピロティ型テラス空間」である。

室内禁煙法後に開店した店舗であり、計画段階から喫煙空間の確保を目的としたテラス空間が設けられた事例である。しかし、厳密には建築空間に定義されるため取り締まりの対象になる。取り締まりの度に罰則金を納め、喫煙席を維持している。建築外部にテラス空間が確保できないことから生まれた店舗デザインである。

店舗Ⅱ（図 14・15）：イスティクラル通り沿い②

イスティクラル通りと交差する別の通りとの角地に位置し、中層建築の地上階に入居する飲食店舗を対象とする。店舗Ⅰと比較し、店舗空間は小規模であるため、ピロティ空間を確保する余裕はない。また、イスティクラル通り側は規制が厳しく、テラス空間を確保することはできない。その対応策として、他方街路側開口部に「張出型テラス空間」を設置している。側面街路に張り出してはいるが、壁面に固定されているため、街路上の常設空間とは位置づけられていない特殊な事例である。形式的には道路占用でも使用でもなく、上階バルコニーのような扱いとなっている。テラス上部にはオーニングが設置され、側面は防風シートで覆われる仕様になっている。

この張出型テラス空間は、室内禁煙法施行以前から存在しており、店側が屋外客席の確保を目的として設置したものであった。室内禁煙法後、喫煙空間となったが、そのデザイン性を行政から評価され、公認の公道使用の事例となった特異な背景をもつ。

4. パリのテラス空間

4.1. 広場立地

店舗K (図 16・17) : バスティーユ広場

バスティーユ広場は、円形交差点を中心に歩道・空地をもつ街区が取り囲んでいる。広場の一角にはオペラ・バスティーユが立地しており、文化・商業の中心地区の一つである。広場に面する商業建築の地上階に入居する、大規模で格式の高い飲食店舗を対象とする。

店舗は広場の歩道に面した街区の一角に位置し、前面には広い歩道が確保されている。店頭には重層的なテラス空間が設置され、3段階のヒエラルキーをもつ。建築側からテラス①、②、③とする。

建築本体1階部分の壁面はなく柱のみで、建築的に開放されている。建築本体に連続し、鉄骨フレームによる常設のテラス①が設置されている。テラス①には大開口折戸^{註11)}が設置されており、ここが施錠ラインとなっている。また、上部は開閉できないガラス製屋根が設置されており、テラス①と店内が建築的に一体化されている。テラス①は禁煙空間になっている。また、歩道占用による常設空間である。

テラス②は、歩道の一時的使用による客席である。側面はガラス製パーテーション、上部はオーニングが設置されているが、前面は開放されている。テラス②は喫煙可能空間になっている。

テラス③の上部・側部に設置される設備はない。テラス②と同様に、喫煙可能空間であり、歩道の一時的使用による客席である。

店舗L (図 18・19) : バスティーユ広場

バスティーユ広場に接続するロケット通り沿いは商業施設が建ち並び、飲食店舗が集積する地区である。

中層建築の1～2階部分に入居する店舗を対象とする。店舗前面はバスティーユ広場に、側面はロケット通りに面し、二方向に店舗立面をもつ。広場側のテラス空間が広く確保されていることに対し、ロケット通り側は客席一列のみである。広場側のテラス空間は、3段階のヒエラルキー(テラス①、②、③)に分類される。

広場側の店舗建築壁面は柱のみで、壁は撤去されている。店舗建築空間にテラス①が連続し、店内と一体的な空間を構成している。テラス①は鉄骨フレーム構造で、前面には大開口折戸、上部には開閉できないガラス製屋根が設置されている。大開口折戸が施錠ラインになっているため、テラス①は極めて建築的な空間である。テラス①は、歩道占用の常設固定のテラス空間である。

テラス②の側面にはガラス製パーテーション、上部にはオーニングが設置されている。テラス②は、歩道の一時的使用による客席である。

テラス③は、②との境界が明らかではないが、オーニングの範囲外とした。テラス③には、側面パーテーションも上部オーニングもなく、完全に屋外空間である。

ロケット通り側は、歩道占用が許可されておらず、客席一列のみとオーニングによる歩道の一時的使用によるテラス空間である。テラス①は禁煙、テラス②・③は喫煙可能空間になっている。

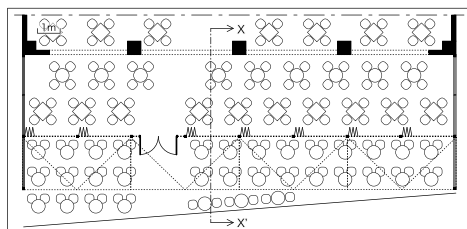


図 16 店舗 K 平面図

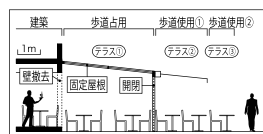


図 17 店舗 K 断面図

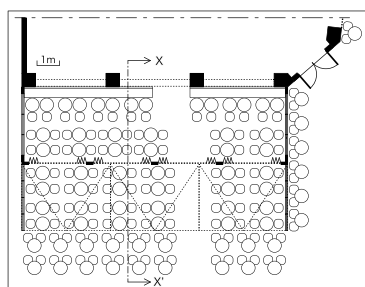


図 18 店舗 L 平面図

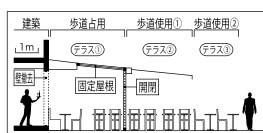


図 19 店舗 L 断面図

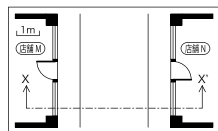


図 20 店舗 M・N 平面図

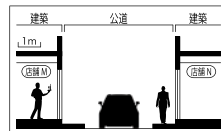


図 21 店舗 M・N 断面図

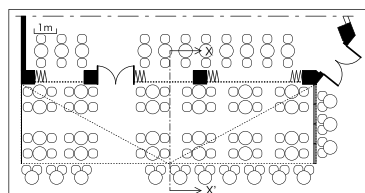


図 22 店舗 O 平面図

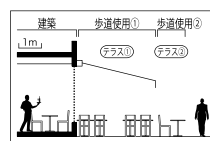


図 23 店舗 O 断面図

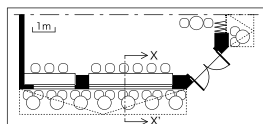


図 24 店舗 P 平面図

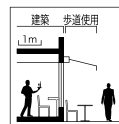


図 25 店舗 P 断面図

4.2. 歓楽街立地

店舗M・N(図20・21): ラップ通り

ロケット通りとシャロンヌ通りを結ぶ直線状の街路である。街路の幅員は狭く、両側に間口の狭いバーや居酒屋が建ち並ぶ。主に若者が集う歓楽街を形成している。車道は一方通行で、歩道も狭い。建築の規模や形態が類似した飲食店舗が街路の両側に建ち並んでおり、そのうち典型的形態の一断面を対象とする。テラス空間をもたない店舗形態の事例として取り上げた。

店舗前面壁面を全面開口し、大開口折戸を設置するなどの仕様は採用されていない。歩道を占有・使用するスペースはなく、いずれも許可されていない。喫煙空間とするテラスは確保できておらず、来店客は歩道上に出て喫煙する。

4.3. 商業地区立地

店舗O(図22・23): シャロンヌ通り沿い①

シャロンヌ通りは、バステュー広場東側に位置し、ラップ通りやケレ通りとも交差する商業地区である。中層集合住宅が建ち並び、地上階は概して店舗となっている。通りに面した中層集合住宅の地上階部分に入る飲食店舗を対象とする。

店舗建築本体は壁面が開口され、大開口折戸が設置されており、ここが施錠ラインとなる。店舗前面の歩道部分にテラス①が設置されている。テラス①は、上部にはオーニング、側部と正面にはガラス製パーテーションが設置されている。ガラス製パーテーションは固定式ではないが、歩道占用の常設固定空間である。店内とテラス①は空間的に分離されている。

テラス②は、オーニングもパーテーションもない屋外空間であり、公道使用の一時的テラス空間である。店内は禁煙空間、テラス①・②が喫煙可能空間となっている。

店舗P(図24・25): シャロンヌ通り沿い②

バステュー広場東側の、シャロンヌ通りとケレ通りの交差点に位置する。ケレ通りを挟んで店舗Oと面しているが、歩道条件が異なる。シャロンヌ通りとケレ通りが交差する角地に立地する中層集合住宅の地上階部分に入居する飲食店舗を対象とする。取り上げるのは、ケレ通り側のテラス空間のみとする。

ケレ通り側の店舗建築は、ガラス製建具の大開口部をもつが、全面開放はできない。店頭歩道部分のテラスには客席一列が配置され、上部にはオーニング、側部には収納式シートが設置されている。歩道に固定されたテラス設備はなく、歩道の一時的使用による客席である。店内とテラスは空間的に分離されている。店内は禁煙空間、テラスは喫煙可能空間である。

5. 考察

(1) イスタンプル

建築改修: 壁面開口

店舗前面の壁面を撤去し、開放的な店頭空間を構築する。大開口折戸や、脱着式ガラス製建

具を使用し、開閉可能な仕様が採用される。店頭歩道の使用が可能な場合は、テラス空間が設置される。テラス空間は常設固定ではなく、一時的使用である。建築改修に着手する契機となったのは、室内禁煙法であり、喫煙席の確保を目的としたテラス空間の設置であった。

店内とテラス空間の境界が曖昧になり、喫煙席も店内に進入する。副次的成果ではあるが、開放的な店舗形態、活気ある街路景観が形成されることとなった。

建築改修：壁面後退

店頭歩道の使用が不可能な場合、既存の建築空間を改修（1階外壁ラインを後退）し、建築区画内にピロティ空間を確保する。店舗は、店内とピロティ空間に分離される。ピロティ空間は常時開放されており、店側は屋外と位置づけ、喫煙空間としている。室内禁煙法的では、このようなピロティ空間は室内と位置づけられるため、取り締まりの対象となっている。

敷地条件により店頭空間を占有・使用できない場合は少なくない。地上階で奥行きのある店舗区画に適したテラス形態といえる。

建築改修：増床

店舗フロアが複層階で構成される場合、上階フロアにもテラス空間の確保が試みられている。上階部分の建築空間の公道への張り出しは、一定の条件下で設置が許可されている。地上階と同様に、上階部分の柱を残し壁面を撤去するとともに、バルコニーを新設する。上階フロアとバルコニーがシームレスな一体的空間となり、屋内外の境界が曖昧になっている。冬期は、バルコニーごと室内化できるようガラス製建具が取り付けられる仕様になっており、視点をかえれば上階部分の「増床」といえる。冬期に室内化された上階フロアであっても「一時的な室内化」と位置づけられ、バルコニー部分の喫煙空間は維持される。

バルコニーと店内をシームレスに接続することで、上階フロア全体のテラス空間化する意図がうかがえる。常時開閉可能な仕様を採用することで、室内喫煙の取り締まりを回避している。

特殊立地：広場・屋上

本来、屋上部分への建築行為は許可を受けることができない。しかし、建築的な壁・屋根を設置しない建前で、屋上部分に鉄骨フレームを組み、客席空間を設けている。開閉式テントや、側面シートにより室内化が可能であるが、建築空間に定義されない「仮設空間」である。屋上客席は、冬期に前面閉じていても、喫煙空間は維持される。

広場空間へのテラス空間の設置は、道路占用という意味ではハードルは高くない。空間的に余裕があるため、常設固定によるテラス空間の設置は容易である。店舗建築自体に、テラス空間との連続性を意識した開口・改修等はみられない。建築空間とテラス空間の一体化はみられず、空間的には分離されている。

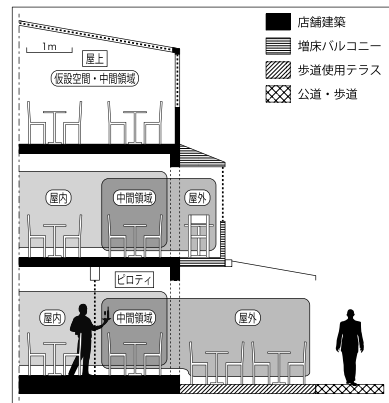


図26 イスタンブル・テラスの空間構成

飲食店舗が高密度に集積する歓楽街において、歩道占有は皆無であり、歩道使用も容易ではない。仮想的建築手法を採用することにより、屋上空間が有効活用されている。宗教的広場への飲食店舗及びテラス空間の設置は、これまでみられなかった新たな試みである。テラス空間は、喫煙空間の確保に留まらず、イスラーム教徒が家族や女性同士でも利用でき、宗教・文化的見地からも貴重な空間といえる。

(2) パリ

建築改修：壁面開口（常時開放）

店頭に常設固定のテラス空間が設置できる場合、店舗建築前面の壁面を撤去し、テラス空間と一体化させている。施錠ラインが常設テラス空間となることから、実質的な増床であり、建築空間の壁面前進といえる。テラス空間の前・側部は大開口建具が用いられるが、屋根は開閉できないガラス製である。

歩道を占有できる場合、屋外的性質を維持したテラス空間の「室内化」が図られている。

歩道占有・使用による分類

歩道使用テラス空間の形態は、オーニングと側部シートで囲われるものと、家具のみの二種類に分類される。歩道使用のテラス空間は、閉店後に収納可能な仕様とされている。歩道が広く確保されている場合、占有が許可される。歩道が狭く、占有・使用のいずれも許可を受けない場合、建築区画内のテラス空間確保を目的とした形態変容はみられない。

占有テラス空間は建築的、使用テラス空間は仮想的である。歩道条件により、占有と使用のテラス空間が重層的に形成されている。イスタンブルでみられるような、建築区画内に屋外空間を確保することはない。

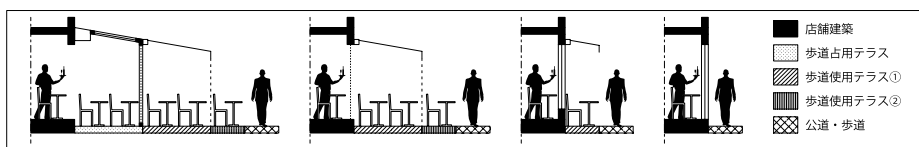


図 27 パリ・テラスの空間構成

6. まとめ

イスタンブルにおけるテラスの空間特性をまとめると以下の点を指摘することができる。広場立地を除くと、歩道占有による常設固定のテラス空間はみられず、基本的には歩道の一時利用によるものである。街路条件の制約により、テラス空間設置が困難である。テラス空間は、地上階・上階の改修による建築的工夫により確保されている。客席壁面・屋根の開閉・脱着可能という「仮設仕様」により、新たな空間概念を創出し、これまでみられなかった場所への進出を可能にした。パリと比較すると、イスタンブルは立体・重層的なテラス空間である。

パリにおけるテラスの空間特性をまとめると以下の点を指摘することができる。建築本体に

テラス空間が進入することはない。テラス空間形態に多様性はみられず規則性が確認された。占有テラスと使用テラスに分類され、その組み合わせによりテラス空間が構成されている。イスタンブルと比較すると、パリは平面・重層的なテラス空間である。

本研究では、イスタンブル調査は夏期と春期、パリは春期に調査を行った。調査を通し、冬期のテラス空間仕様が異なる可能性を指摘することができる。特に冬期は、テラス空間の快適性を確保するため、空間的・設備的な措置が講じられると推察され、多様な空間属性の把握が可能と考えられる。本研究とあわせ、夏期・冬期の空間変容に着目し、考察することを今後の課題としたい。

謝辞

本研究の一部は、公益財団法人たばこ総合研究センターの助成によりなされたものである。

注

- 注 1) 「東京都建設局」, <<http://www.kensetsu.metro.tokyo.jp/douro/syanzerize/index.html>> (2014.9.10 アクセス)
- 注 2) 本研究では、店頭公道上に常設固定されたテラス空間を「占有テラス」と定義した。占有テラスは毎日の営業終了後もそのまま維持される。
- 注 3) 「国土交通省：道路：道路占有」, <http://www.isc.meiji.ac.jp/~tomura/references_guide.html> (2014.9.10 アクセス)
- 注 4) 東京都福祉保険局・保健所では、「論文飲食店営業及び喫茶店営業の屋外客席に関する要綱」18 福保健食第 1846 号にて定められている。
- 注 5) トルコ・室内禁煙法の内容（抜粋）は以下である。法律番号 5727「たばこ製品の有害な影響の防止に関する改正法」第 2 条（1）禁煙とするのは公共施設屋内、民間人経営による飲食店の屋内。（2）ただし以下は除く。高齢者介護施設、精神病院、刑務所。（3）宿泊施設では喫煙者専用の客室。（4）たばこの臭いと煙の流れを遮断し、換気システムを装備した場合。
- 注 6) 本研究では、店頭公道上に一時的に配置されたテラス空間を「使用テラス」と定義した。使用テラスは毎日の営業終了後には店内に撤収しなければならない。
- 注 7) 壁面に取り付けられた開閉・収納式の日除け・雨除け。フレームが必要なテントに対し、オーニングは必要としないため、建築設備とは位置づけられていない。
- 注 8) 開口部全体の窓や扉が取り外せる仕様。
- 注 9) ガラスを主な構成材料とし、枠組は金属製。
- 注 10) 建築 1 階部分の柱のみを残し、吹きさらしとした建築様式。
- 注 11) 大きく開口された間口に取り付ける折戸式の建具。イースターカーテン、アコーディオンドアとも呼ばれる。

参考文献

- 1) 加藤浩司, 渡辺直, 井澤知旦, 北原理雄: 欧米における街路空間の公共利用制度に関する研究 6 都市のオープンカフェ運用を事例に, 日本建築学会計画系論文集 530 号, pp.185 ~ 192, 2000.4
- 2) エルファディング スザンネ, 卯月盛夫: ドイツにおけるオープンカフェの法制度とその運用に関する研究 15 都市を事例に, 日本建築学会計画系論文集 566 号, pp.97 ~ 104, 2003.4
- 3) 土井裕佳, 市川尚紀: 水辺の社会実験に関する研究 広島・大阪のオープンカフェを対象として, 日本建築学会中国支部研究報告集 33 号, pp.431-1 ~ 431-4, 2010.3
- 4) 山本卓史, 安田丑作, 三輪康一, 末包伸吾, 栗山尚子: 街路空間の賑わい創出の手法としてのオープンカフェとその評価に関する研究 三宮中央通りと有馬温泉・湯本坂における社会実験事例の分析を通して, 日本建築学会近畿支部研究報告集 47 号, pp.493 ~ 496, 2007.5
- 5) 清水奈緒, 井澤知旦, 浦山益郎, 松浦健治郎: 街路空間・公開空地を利用したオープンカフェの試みに関する研究 名古屋市久屋大通・広小路通での社会実験を通して, 日本建築学会東海支部研究報告集 41 号, pp.745 ~ 748, 2003.2
- 6) 清水奈緒, 井澤知旦, 浦山益郎, 松浦健治郎: オープンカフェ実験による街路空間の活用に関する研究 名古屋市久屋大通・広小路通の社会実験を通して日本建築学会東海支部研究報告集 42 号, pp.669 ~ 672, 2004.2
- 7) 小林茂雄, 津田智史: オープンカフェの利用状況による歩行者の注視行動の変化, 日本建築学会計画系論文集 623 号, pp.87 ~ 92, 2008.1
- 8) 土田淳一, 横張真: 接道部開放型飲食店舗における境界デザインと前面道路の関係の解明, 都市計画論文集 36 号, pp.751 ~ 756, 2001.10
- 9) 青柳瑞恵, 森繁: 東京におけるオープンカフェの立地とデザインに関する研究, 都市計画論文集 31 号, pp.223 ~ 228, 1996.11
- 10) 宍戸克実: トルコ・イスタンブールの喫煙文化からみる都市景観変容, 財団法人たばこ総合研究センター助成研究報告 2011 年度, pp.130 ~ 145, 2011
- 11) 篠原修, 加藤源, 北原理雄, 都市づくりパブリックデザインセンター: 公共空間の活用と賑わいまちづくりーオープンカフェ/朝市/屋台/イベント, 学芸出版社, 2007

図版出典

図 1-2 Googleマップより作成 (2014.9.10 アクセス)

図 7-11 参考文献 10) より加筆修正

図 13-15 参考文献 10) より加筆修正